

第一回 Quiet Dialogue : インビジブルな存在と私たち フィルムスクリーニング レポート

今回は第一回目の上映会として、本展の参加予定作家カサリナ・グルツェイ、セナ・バソズの作品を鑑賞しました。2名の作家とスカイプで中継し、作品の意図やジェンダーに関する考えを聞くことで、それぞれの作品の理解を深め、国によって異なるジェンダーの問題を共有することができました。

最初に上映したカサリナ・グルツェイはオーストリア出身の作家です。上映した「Dialogue I-IV」というビデオインスタレーション作品は、白人女性とアジア人女性が至近距離で対面している様子がクローズアップされたカメラ構図で構成されます。二人の女性は映像の中で、日常で行われるジェスチャーを中心にコミュニケーションをとります。この様子をカメラは片方の女性にだけ焦点をあて、そしてそれが大きく入れ替わることで画面上にダイナミックな変化をもたらします。また、次第に二人のコミュニケーションは激しくなり、互いの顔を交代で平手打ちしたり、口から水を吐き出して相手の顔にかける、など対立するようなコミュニケーションが行われます。この衝突はこの人種の違う2人の女性の間にある言葉の壁や文化の違いなどを鑑賞者に想像させます。そして言語やジェスチャーによる対話の代わりに、眼差しがコミュニケーションの主体となり、ユニバーサルランゲージとしての役割を果たしていると言えるでしょう。グルツェイは、女性が被害者のイメージではなくアグレッシブで暴力的なイメージとして表象されている作品がまだ少ないのではないかとこのことをきっかけに、本作を制作したそうです。

二番目に上映したのはルミエール兄弟作の「Exiting the Factory」です。これはグルツェイが「Workers leaving a factory(again)」という実験映像を制作する際に参照した作品です。歴史上最初に発表された映画と言われているこの作品の有名な一場面には、工場から沢山の労働者が出てくるというシーンがあります。その労働者の中には多くの女性も含まれていました。しかしルミエール兄弟以後の映画史では、多くの映画監督がこのシーンを引用したにも関わらず映画の中に登場するのは男性労働者のみで、女性達の姿はありませんでした。19世紀、産業革命によって実際は多くの女性達が工場の働き手となっており、実際にルミエール兄弟が撮影した工場にも多く女性が働いていました。しかし、映画や写真等の記録媒体には、彼女達の姿は残っていません。また興味深いことに、その工場は銀版等の写真や映画の素材を製作する工場だったそうです。このように、写真や映画の歴史には女性の労働力が捧げられていたのに、表に見えることなく後世へと受け継がれそれらは見えない存在となってしまったのです。

三番目に上映したのは、これらの歴史への興味をもとに制作した「Workers leaving the factory(again)」です。オーストリアのリンツにある2011年に閉鎖されたタバコ工場で、多くの女性を含む労働者の人々が工場内を歩いて外へ出て行くまでを撮影した実験的な映像作品です。暗い工場の廊下にかつて使用された蛍光灯を点滅させ、また工場から聞こえるノイズも

使った音と光のインスタレーションとしての要素も持ち合わせています。この作品が撮影された工場には、実際に多くの女性達が働いていました。オーストリアにおけるタバコ産業では女性労働者が重要な担い手となった歴史もあります。しかし、現在はタバコ産業の東洋へのアウトソーシングが進み、オーストリアでは多くの工場が閉鎖されているそうです。本作はこの空っぽになった工場の空間で何が起きているのかを探るための実験的な試みです。廃墟となった工場内の音（ノイズが発生するそうです）を録音し、室内の蛍光灯でライトのインスタレーションは、工場を再び生き返らせるような試みだと彼女は言います。また、人々が建築物の中を歩いて行く様子は、工場の建築自体が迷路のようであり、まるでコントロールされたハムスターのように自動的に工場の外へ歩いていくように見えます。

この作品から発展したディスカッションでは、表象されないイメージは存在しないことになってしまうのかということや、女性が技術的な仕事には就いていないという偏見が今もあるのではないのかということが主に話題になりました。実際には電話交換手やタイピストなどの職種が女性の社会進出のきっかけを作ったとも言えますが、これらの職業は時代の変化によって失われていることも指摘されました。ジェンダーがどのように職業に影響を与えるのか、発展的な議論がされました。

そして次に、セナ・バソズの映像の上映とディスカッションが行われました。上映したのは「The Sick Nurse」、「Be the Doctor Practice Nursing」、「Note on a Parallel Life」というバソズがナースのコスチュームを着て行う様々なパフォーマンスを記録したシリーズの映像作品です。

彼女がナースという職業に対する興味は、彼女の父親が医者だったこともあり、幼少期の自身の憧れの職業だったからだといいます。また、30代になるまでに結婚や出産をするのが望ましいというようなジェンダー役割の固定概念が未だに根強いトルコの習慣や固定概念からの抑圧を乗り越えようと思いついた発想が、ナースという職業はこのジェンダー役割の固定概念をすべて担う、完璧な女性の象徴なのではないかということです。無我、奉仕的、権威を欲しない、思いやる・・・というようなナースという職業イメージの典型的な性質は、伝統的な理想の女性像と結びつきます。そこで「Be the Doctor Practice Nursing」で彼女が試みたのが、ニューヨークの人ごみの中でナースのコスチュームを着て、知らない人の脈を測るというパフォーマンスです。ナースの衣装は、彼女が幼い頃の憧れだった80年代のナースのスタイルを選びました。

一方映像作品「The Sick Nurse」では、彼女は家の中で病気のナースとして演じています。それは彼女自身の自己崩壊の葛藤を表現しており、本来なら人をケアする前に気にしなければならない自分自身の健康管理を怠り病気になったナースが、どうしていいのかわからない自分自身をパフォーマンス映像に記録しました。それは、ナースの無私で献身的であるという固定概念への批評的な視点を示しています。また音声は前述のニューヨークでのパフォーマンスで録音した音を使用しています。

ディスカッションでは、看護師の制服デザインの時代と国による変化（スカートからパンツスタイル）、また伝統的な女性観についての日本とトルコの共通点も話し合いました。

これらの二つのシリーズの映像を通じて彼女が導きだした一つの結論は、自然があらゆる力を行き変えさせ全ての問題を解決する糸口となるのではということです。冷蔵庫の中で凍った小鳥が再び息を吹き返し、自然に放つというシーンには再生というテーマも含まれているように、自然に還ることが一つの大きな答えなのだと考えているそうです。彼女の制作の目標は、芸術的なアプローチで社会に対する不安を取り除くような作品を制作することであり、芸術と癒しをテーマであると言います。このシーンについては、イスラム教の神で鳥を生き返らせる神についての話や、神々の殆どが男性であることなどが話し合われました。

東京を舞台にパフォーマンスを行った「**Note on a Parallel Life**」の背景には、現在政治的に不安定なトルコでは多くの人々が国を去り、移民となって別の国へ移動するという深刻な出来事がきっかけとなっています。彼女の周りも例外ではなく、既に多くの友人達が移民となって別の国に暮らしているそうです。この様な状況の中、東京で展覧会を行う事となった彼女は、「もし自分が東京で移民になったら」という仮定で演出したパフォーマンスを行いました。ナース服を来た彼女が大きな消しゴムを持ち、道端で何かを消す行為を行いました。この消しゴムの中にスピーカーが入っていて、イスタンブールの街で録音した音を再生しながら、同時に東京で新たに音を録音しています。これは、二つの異なる状況にどのように人が適応していくのかを表しており、それは一度消し、そして新しいものを取り込むことなのだと言います。そして最期は消しゴムを自然へ返すという、他の作品と同様の結末があります。この作品ではジェンダーの観点よりも、移民という観点を焦点を当てた作品となっています。

最後に上映した「**Time Worm**」という作品では、トルコ東部のディヤルバクル地域のクルブ郡という紛争のトラウマが残る地域で撮影されたドキュメンタリー映画です。ディヤルバクル地域では2000年代の初めにトルコ政府による地域復興を目的とした伝統産業、シルク産業の復旧が導入されました。この地域は元々シルクロードの上にあり、アルメニア人の人々がシルク産業を発展させた歴史があります。しかし度重なる紛争のため産業は失われ、人々は土地を離れ衰退して行きました。この地域を復興させるべく、シルク産業が再度導入され、バソズはこの地域で取材を行いました。この映像はクルブ郡でシルク産業を営む人々の日常と、地元の子供達と行ったパフォーマンスを撮影したものです。悲しい事に現在はまた紛争が再開してしまい、彼女が撮影した人々は今も危険にさらされているそうです。シルクを生み出すために家畜化された生態を持つ蚕の一生は、蛾に変わる直前に非常に残酷な形で死を迎えます。この蚕のイメージは、紛争の危険にさらされる多くの子供達の人生のメタファーでもあります。パフォーマンスでは子供達は蚕の幼虫の一生を演じ、死んでから再び蘇る物語を演じました。そして、再

生と自然に最も密接に繋がっている人物として一人の老女が映像の中で中心的な役割を果たしています。

全ての映像を観た後は、今後どのようなトピックに焦点を当てていくかを話し合いました。最初に挙げられたのは労働とジェンダーの関係性です。

「Time Worm」の作品では女性が過酷で不衛生な仕事の殆どを行っているという事実が指摘されました。またインドネシアから台湾や香港へ家政婦として出稼ぎをする女性労働者でも数多くの方が職場で性暴力を受けている問題、また女性の賃金の低さについても話し合いました。

オーストリアではシリア難民の受け入れ問題と右翼的なフェミニストが結託している動きがあることも話し合いました。難民による性暴力等で懸念される治安の悪化は、例えばドイツでも問題になっています。ここで注目すべき点は、右翼的思考とフェミニストの思考が合致するという点です。

最近インターネット上で話題になった#MeToo 活動の国による広がりの違いについても話しました。オーストリアでは大きな広がりを見せましたが、日常に女性差別が蔓延しているトルコでは意外にも広まらなかった点を挙げていました。多くの女性が差別や暴力を当たり前のように経験している国では、「わざわざ声を上げるまでもない。」という態度で受け止められている印象だったと言います。日本では、最近になってようやく広まりニュースでも多く取り上げられています。

その他、インドネシアで軍隊に入隊する女性に処女かどうかをテストする伝統があり、それらが近年になってようやく見直されるようなことができたという衝撃的な為来りも挙げられました。トルコでも処女性はまだに結婚相手に求められる要素である等、女性差別的な風習や観念、価値観についても話し合いました。

男女平等ランキングの結果でも分かるように、順位に差はあれども未だにジェンダー格差が社会の中で浮き彫りになる状況はどの国にも当てはまり、そしてその中でもその国固有の問題や歴史、また人々の受け止め方があることを実感しました。今後は、日本のジェンダー問題についての記事をシェアしながら、他国の状況や意見を交換し、比較することで考えを深めていこうと思います。